

東京藝術大学音楽学部 紀要 第34集 抜刷 平成21年3月

のりすぎかじゅ  
乗杉嘉壽校長時代の東京音楽学校 昭和3年～20年

—— その建学の精神の具現化と社会教育論の実践 ——

(2)

橋 本 久美子

のりすぎ かじゅ  
乗杉嘉壽校長時代の東京音楽学校 昭和3年～20年

その建学の精神の具現化と社会教育論の実践

(2)

橋本久美子

2-3 第2期 欧米視察から大東亜戦争前まで(昭和6年9月～16年12月)

第2期を、プリングスハイムの在任中「第2期a」と退任後「第2期b」とに分ける。

2-3a 第2期 a プリングスハイム旋風と邦楽科設置(昭和6年9月～12年7月)

2-3a-1 第2期 a の特徴

乗杉校長の学校運営という観点からこの時期を一言で表すならば、建学の精神の再興と乗杉社会教育論的學校運営の確立ということになろう。乗杉時代17年半の中でも、乗杉社会教育論に基づく実践には面目躍如たるものがあり、建設的な学校運営と事業展開、教育上の整備を集中的に実現した時期ということができよう。

2-3a-2 乗杉社会教育論的实践による「東西二洋の音楽」

この時期の2大事項は、プリングスハイムの活躍と邦楽科設置に集約されるであろう。すなわち、一方ではプリングスハイムのエネルギッシュな指導を最大限に生かすことによって洋楽のレベルアップを図り、作曲家の育成にも力を注いだ。他方、東京音楽学校開校以来、邦楽教育は副科実技、あるいは実技レッスンのみ行う選科に甘んじていたが、これを正規の「邦楽科」として位置付けたのである。乗杉は、日本の音楽を教えてこそ日本の音楽学校である、との考え方を繰り返し表明し、唯一の官立音楽学校のあり方に揺るぎない信念を持っていた。明治40年に邦楽調査掛が設置され『箏曲集』『近世邦楽年表』等の成果を見たが、邦楽専攻生を受け入れる邦楽科は、それとは別の意味を持つ。開校以来、西洋音楽中心に固まりつつあった音楽学校において画期的なことであると同時に、家元制度による独特な師弟関係のあり方を作り上げてきた伝統邦楽の世界に対しても一石を投じるもので、邦楽が官立の教育機関、しかも近代国家形成の一翼を担う学校に洋楽とともに位置付けられた意味は大きく、「東西二洋」が啓発し合う音楽学校の原型を作った。

音楽取調掛創設から間もない明治12年10月30日付で、御用掛伊澤修二は同掛の目的と任務を「音楽取調ニ付見込書」にまとめ、文部卿に提出した。そこで謳われた3項目は東京音楽学校に建学の精神として引き継がれ、活用されることとなる。邦楽科設置は、「第一項 東西

二洋ノ音楽ヲ折衷シテ新曲ヲ作ルコト<sup>1)</sup>を学校組織として具現化した第一歩であり、建学の精神の乗杉流の再興とも言えよう。乗杉は、洋楽を育成することによって伝統邦楽を刺激し「国楽」を作る、という構図を描いた。もっとも「東西二洋の音楽の折衷」も「国楽」も、この言葉を掲げた当時、多分に予定調和的な含蓄に富んだ言葉選びが為されたように思われる。ともに魔力に満ちた道標であり、真の意味においては実現容易ならざるものではなからうか。いくなれば国家的使命を超えた、壮大な夢であり、遙かなる道程である。

### 2-3a-3 建学の精神と呼応する乗杉社会教育論の実践

東西二洋の一方、すなわち洋楽分野におけるプリングスハイムの活躍を軸にした学校運営では、彼の活動を後押しして欧州に学び、早期教育を実践し、児童合唱を全国に先駆けて行い、演奏会で成果を世に問うた。演奏会の回数を増やし、演奏旅行をさかんに行き、それによって洋楽の社会化を図った。その際、全国の現場教師を集めての講習会、研究会など、音楽学校を教育事業の拠点とし、レコード録音を行い発売する等々、学校の社会化を伴った。もう一方の邦楽科設置は、プリングスハイムのエネルギーな行動力と呼応するように、「科」の有無に拘わらず、選科邦楽を拡充し、演奏活動を行い、邦楽科設置に至った。邦楽科設置は、大正時代にいったん機運が高まったものの、関東大震災等で頓挫していたが、乗杉着任以来あらためて準備が進められ、昭和11年6月に実現する。洋楽によって東京音楽学校の社会教育論的实践が勢いづいたタイミングで設置された邦楽科は、その恩恵に浴し、直ちに演奏会、出張演奏、レコーディングなどを行う環境が整っていたことになる。

この時期で特筆すべきは、昭和8年の上野児童音楽学園の開園であろう。これは同声会を設立者として、音楽学校の空き教室を利用し、音楽学校の教員と研究生を講師として週2回、音楽の早期教育を官立学校が全国に先駆けて校内で実践したものである。同学園は、戦況の悪化に伴い閉鎖され、戦後も復活することはなかったが、卒業後、音楽学校に進学する者もあり、200名の児童合唱はプリングスハイム指揮の演奏会にも出演し、楽壇に明るい話題を提供した。この啓発的な事業は、今日いうところの社会還元、社会貢献、地域連携そのものである。社会教育論的な実践という点においても、また音楽学校と社会との連携という点においても、同学園については精査されるに価しよう<sup>2)</sup>。

御前演奏や、校舎や設備の拡充は、一貫して乗杉時代の特徴である。プリングスハイム在任中は、国全体が刻々と国家総動員体制の波に洗われ始め、音楽学校にも確実に波は押し寄せていたが、まだ学舎は勉強できる環境にあった。この時期、乗杉社会教育論の実践が最も勢いづき、建学の精神との調和を見たと考えられる。すなわちプリングスハイム旋風とともに乗杉校長時代の東京音楽学校はほぼ整えられ、全容を現したのである。

#### 2-3a-4 プリングスハイムの着任

乗杉校長が欧米視察に向け、昭和6年8月26日に東京駅を発ったのと同じ頃、一人のユダヤ系ドイツ人音楽家がベルリンを発ち、シベリア大陸を横断し、約2週間の旅程で上野へ向かった<sup>3</sup>。東京音楽学校のお傭い外国人教師に迎えられるクラウス・プリングスハイム（1883年7月24日ミュンヘン郊外～1972年12月7日東京。1931年9月8日～1937年7月31日在職）である<sup>4</sup>。

彼は9月8日東京に着き、11日、2学期始業式の奏楽堂壇上に姿を現した。高野辰之校長代理が次のように紹介する。「氏はミュンヘン市に生まれウインでマーラーに就き、後プラーグブレーメン等の劇場の歌劇作者、舞台監督や顧問に歴任し、1918年マックス・ラインハルトに招聘せられたといふ立派な経歴をもつて居られる方で、斯くの如き世界一流に属する先生を迎えて吾々は歓喜に堪へぬ」<sup>5</sup> 48歳の新任教師は歴代お傭い外国人教師の中でも、歌劇場音楽監督と指揮者歴20年以上、ベルリン・フィルハーモニーの客演指揮者としてマーラーの全交響曲と歌曲を演奏した実績を持つ一方、評論家としてもドイツ国内の新聞4紙の批評を担当する大物であった。ユダヤ系の名門プリングスハイム家は、祖父ルードルフが一代で財を成し、数学者で美術蒐集家の父アルフレートは息子とピアノ連弾でヴァーグナーを楽しみ、ナチスに接収されるまでミュンヘンに美術館のような豪邸を構えていた。

欧州楽壇第一線で活躍する大物が、極東の音楽学校の招聘に応じたいきさつについては主に次の二つが伝えられる。一つは長男ハンス・エーリク・プリングスハイムがかつて本学百年史編集委員会の取材<sup>6</sup>で語った、ベルリン市立劇場（現ドイツ・オペラ）総監督への就任を逃した件である。当時の市議会与党社会民主党の機関誌「フォアヴェルツ」の批評家プリングスハイムが同劇場の次期総監督に選出されることはほぼ確実視されていた。ところが決定直前の深夜、待ちきれず議長宅にかけた電話をとりついでもらえなかった彼は、持ち前の癩癩を爆発させて電話口の女性を罵倒した。翌日、すっかり機嫌を取りなおし、議長に「お宅の女中はひどい」と言うと、「それは私の妻だ」。プリングスハイムは、東京音楽学校に奉職中のシャルス・ラウトルuppから後任にとの誘いを受けていたのを思い出し、東京行きを決意したという。もう一つは、次男クラウス・フーベルト・プリングスハイムが『クラウス・プリングスハイム二世回想録』<sup>7</sup>に記しているように、彼の批評活動である。彼は芸術の幅広い分野で執筆活動をしていたが、気に入らないものは徹底的にこきおろした。そして批評対象のほとんどが気に入らなかった。つまりクラウス二世によれば、父の批評がドイツ中の芸術家の反感を買い、訴訟も起こるほどであったため、父に東京行きの白羽の矢が立ったのだという。いずれにせよ、深夜の電話事件から3ヶ月後、彼は東京へと旅立った。

彼の来日は政治的亡命ではなかった。しかしその後まもなく、ユダヤ人を取りまくドイツ国内の状況は一変し帰国どころではなくなり、昭和11年の日独防共協定締結後は日本においても種々の圧迫を受けることとなる。ともあれ上野の山の創立44年目の音楽学校で、欧州楽

壇の第一線に照準を定めたプリングスハイムによる猛特訓が始まった。

### 2-3a-5 乗杉校長の欧米視察

乗杉校長の旅程と見聞した内容は『同声会報』に連載され<sup>8</sup>、それだけで1冊になるほどの分量であるが、帰国後の彼の学校運営のヒントが多く含まれるので、以下、簡略に記す。

東京を後にした校長は、航路9月1日上海着で音楽学校卒業生の歓迎を受け、香港、シンガポール、ペナン、コロンボ、アデン、紅海、スエズ（カイロでピラミッドとスフィンクス見物）を経て10月2日ナポリに上陸した。ここでも卒業生の出迎えを受け、音楽学校と図書館を視察。図書館譜の完備されたさまに接して、校長の頭をよぎるものは東京音楽学校の状況であった。「本校などでは人件費や雑費の中からやり繰りして図書や楽譜乃至楽器等迄購入している悲況で、これ等の各学校と比較して劣らぬ力を持つ学校にするなど、到底思いも寄らぬことで、我々は大いに当局者達の蒙を拓かねばならぬ」と洩らしている。乗杉が行く先々で図書館にことのほか関心を示したのは、文部省社会教育課長時代に図書館職員教習所を設立した経緯とも関係があろう。同教習所は図書館情報大学を経て、現在の筑波大学図書館情報学群および同大学院図書館情報メディア研究科に至っている。

ローマで10月4日すなわち東京音楽学校の52回目の創立記念日を迎えた校長は、宿泊先で、夜更けまで留学中の卒業生とともに同校吹き込みのレコードを聴いて上野に思いを馳せ、翌朝ミラノに向かった。ルツェルンを観光し、ヴェニスでゴンドラに乗り、美術館入り口の柱に描かれたムッソリーニの巨大な顔に目を見張り、ウィーンに出発した。

ウィーンではモーツァルトのオペラ《ドン・ジョバンニ》に感動し、経営難のホッホシューレで陣頭指揮を執る校長と熱く語らい、日本出発から50日目にベルリンに到着した。当地で卒業生たち、後に東京音楽学校に奉職するレオニード・クロイツァー、地元新聞記者等の出迎えを受ける。ベルリンで卒業生達8人が校長を囲む写真がある。その一人は昭和38年から東京藝術大学第4代音楽学部長、44年から学長をつとめるピアニスト、福井直俊である。ドイツ不況の折、乗杉の宿泊先には日本での職を求めるドイツ人も数人押し掛けた。ホッホシューレでは、ベルリン大学で音楽史の講義も持つシュネーマン校長が自ら3日間にわたり終日校内を案内し、乗杉はその親切と熱誠に敬服した。乗杉が圧倒された音楽学校事情は、学校にオーケストラが三つ、合唱団が四つあり、東京音楽学校でいう予科クラスでもブラームスやブルックナーをどんどん合わせていたことである。なかでも管楽器に開眼し、「初めて管の持つ音の美しさを知った」と記している<sup>9</sup>。同地ではオペラ《オベロン》と《マクベス》を鑑賞し、ストラヴィンスキー、クリングラー、フルトヴェングラーの指揮にも接した。教師が自ら模範演奏をしてみせるレッスン風景、一般の中学校で盛んに行われる学校オペラ、少年合唱の澄み切った歌声、年端のいかない子供たちが暗譜で難曲を弾く姿など驚きの連続であった。プリングスハイムの来日後もベルリンに暮らすララ夫人に面会することも忘れな

かった。ベルリンの後、パリ、ロンドン、ニューヨーク、シカゴと巡り、帰国した。ニューヨークで再会したプリングスハイムの前任者ラウトルップの住まいには「勲六等旭日章」が飾られていた。

#### 2-3a-6 プリングスハイム在任の頃

プリングスハイムが着任した頃の学校はどのような状況だったのであろうか。『昭和七年度東京音楽学校年報取調条項』中、「設備」の項によれば、校舎と奏樂堂の窮状を訴える様子は乗杉赴任当時と大差ない。奏樂堂が狭いために定期演奏会の会場を日比谷公会堂に移したことが「多大ノ不便ト不利ヲ伴フモノアルニ拘ラス最近数年来校外ノ公会堂等ヲ借用シテ演奏会ヲ開催シツツアルノ状態ナリ」と記され、校舎の大規模修繕を行ったことが「偶々<sup>(たまたま)</sup>本年度初ニ於テ精査ノ結果其ノ危惧最モ多キコトヲ発見シ応急策トシテ全校舎ノ大修理ヲ施シタリ然リト雖之僅カニ一時ヲ塗糊スルニ過キス」と報告されている。

注目されるのは「生徒」の項である。当時、音楽学校は思想問題に神経を尖らせていた。昭和7年、8年、9年と生徒の父兄宛に訓育資料を作成、配付して各家庭でも赤化防止への協力を求めた<sup>10</sup>。ところがこれと矛盾するようであるが、同年の奏樂堂では、批評家を招いて非公開ながらプリングスハイム指揮により、ブレヒト台本、ワイル作曲による《ヤーザーゲル》試演が世界初演から2年後に行われた。ブレヒトの台本は日本の能の《谷行》を原本としながら、筋立ては大幅に作り替えたものである。《谷行》では山伏阿闍梨が同行した弟子を掟に従って谷行にしたものの嘆き悲しみ、ついには伎樂鬼神を呼び寄せ弟子を蘇生させるが、先生と生徒が登場する《ヤーザーゲル》は、高い使命のためには掟は守らねばならないと説き、生徒を谷に落とし、掟が守られたことを賛美して終わる。興味深いことに、奏樂堂での演奏について、台本の背景にある共産主義的傾向について学校側から疑問が呈された形跡がなく、世の批評家もそのことに触れず、むしろ長く途絶えていたオペラ復活への第一歩として歓迎している。「学校オペラ」は教育上ふさわしいというプリングスハイムの主張をそのまま受け容れたのか。音楽上の訓練以外のことには目を瞑ったのか。たしかに昭和7年の奏樂堂に非古典的で斬新な響きのドイツ語の合唱や、オーケストラが響いたことは、それだけでも画期的なことであった。

以下は『昭和七年度東京音楽学校年報取調条項』より「生徒」の項である。

「生徒 生徒訓育ノ成績ハ一般ニ良好ニシテ学力亦漸次向上シツツアルヲ認ムルモ本年度ノ初メ生徒ノ思想問題研究団体結成ニ関スル事件発覚シ為ニ退学者七名、停学処分ニ附シタル者六名、譴責処分ニ附シタル者四名ヲ出シタルハ本校嚆矢ノ事件トシテ最モ遺憾トスル所ナリ然レトモ其ノ処置宜シキヲ得テ之ヲ根絶シ爾来生徒ノ態度緊張ヲ見ルニ至リタルハ極メテ慶ヒトスル所ナリ尚ホ年度末ニ於テ品行善良学力優秀ノ廉ヲ以テ賞与セルモノニ本科生徒五名、甲種師範科生徒二名、在学中精勤ノ故ヲ以テ表彰セル者本科生徒一名、甲種師範科生

徒四名アリ]

次は『昭和十一年度東京音楽学校年報取調条項』中、「概況」と「生徒」である。「概況」に、邦楽科設置の記載と、演奏会の報告がある。

「概況 本年度ニ於ケル生徒卒業証書授与式ハ参月式拾式日之ヲ举行シ本科卒業生参拾式名（内声楽部卒業生八名、器楽部卒業生式拾式名、作曲部卒業生式名）及甲種師範科卒業生参拾八名ニ対シ夫々卒業証書ヲ授与シ併セテ研究科、聴講生、選科及能楽囃子科修了者ニ対シ各修了証書ヲ授与セリ

本年度ヨリ本校ノ学科ニ新ニ邦楽科ヲ設置セラレ七月ヨリ其ノ授業ヲ開始セリ

毎年定例トシテ開催スル定期演奏会其ノ他年度内ニ於テ開催シタル主要ナル演奏会左ノ如シ

| 演奏会名称      | 開催月日   | 会場     |
|------------|--------|--------|
| 研究科修了演奏会   | 四月廿五日  | 本校奏楽堂  |
| 選科邦楽修了演奏会  | 五月 九日  | 本校奏楽堂  |
| 選科洋楽春期演奏会  | 五月三十日  | 本校奏楽堂  |
| 第七拾九回音楽演奏会 | 六月二十日  | 日比谷公会堂 |
| 第八拾回音楽演奏会  | 十月十七日  | 日比谷公会堂 |
| 邦楽演奏会      | 十月七日   | 本校奏楽堂  |
| 第八拾壹回音楽演奏会 | 十二月十九日 | 日比谷公会堂 |
| 第八拾貳回音楽演奏会 | 二月廿七日  | 日比谷公会堂 |
| 卒業演奏会      | 三月廿二日  | 本校奏楽堂  |

右ノ他全国高等女学校長招待演奏会壹回、本校生徒ノ組織スル学友会ノ主催ニ係ル演奏会七回、本校内設置ノ上野児童音楽学園第三回演奏会及卒業演奏会ヲモ開催セリ

本年度ニ於テ生徒ノ地方出張演奏ヲ兼ネタル修学旅行ヲ実施スルコト五回、内三回は邦楽科生徒トス

|        |            |        |           |
|--------|------------|--------|-----------|
| 六月二十六日 | 大阪市（吹奏楽）   | 同月 五日  | 和歌山市（洋楽）  |
| 同月二十七日 | 大阪市（洋楽）    | 同月 六日  | 奈良市（洋楽）   |
| 同月二十八日 | 大阪市（洋楽）    | 同月 七日  | 名古屋市（洋楽）  |
| 十月 十六日 | 仙台市（邦楽）    | 同月 廿九日 | 横須賀市（邦楽）  |
| 同月 十七日 | 盛岡市（邦楽）    | 十二月 四日 | 名古屋市（邦楽）  |
| 同月 十八日 | 新潟市（邦楽）    | 十二月 五日 | 岐阜市（邦楽）   |
| 十一月 三日 | 浜松市（洋楽）    | 十二月 六日 | 津市（邦楽）    |
| 同月 四日  | 滋賀県彦根町（洋楽） | 十二月 七日 | 宇治山田市（邦楽） |

年間16回の出張演奏という回数之多さに加え、洋楽と邦楽がともに8回ずつ、同じ回数行

われていることが目を惹く。

ここで昭和11年度の同校の生徒数から洋楽系と邦楽系のバランスを見ておこう。

まず洋楽系は、予科・本科・研究科全学年併せて188名、甲種師範科が119名である。聴講生45名も本科・研究科の学科目を選修するので、洋楽系に属する。選科では唱歌・ピアノ・弦管・作曲を併せて705名、そのうち群を抜いて多いのはピアノの女子である。以上を合計すると1,047名の生徒が東京音楽学校で洋楽を学んでいたことになる。これに対して邦楽系はどうであっただろうか。邦楽科はまだ1年生のみ17名である。選科では能楽・箏・三絃・長唄を併せて233名。この中では長唄が最多で男子5名、女子81名である。他に修業年限7カ年以内と定めた能楽囃子生徒養成規定により設けられた能楽囃子科があり、6名が在籍していた。邦楽系の合計では256名となる。

全体の割合としては、洋楽系対邦楽系が4対1であるが、正科としての割合を見ると、その差はさらに開き、「予科・本科・研究科・甲種師範科」対「邦楽科」は18対1である。これらの数字は昭和11年当時の東京音楽学校における洋楽と邦楽のバランスを如実に示している。また邦楽系の内訳から見えてくることは、同校創立当初より正科として設置された洋楽系とは対照的に、邦楽科設置にあたっては、選科の邦楽専攻がきわめて重要な役割を果たし、その布石となったということではなかろうか。

### 2-3a-7 第2期aの出来事

この時期の『東京音楽学校一覧』中の「沿革」より、奨学金関係を除くと、教育内容に関わる規程では作曲、邦楽、管絃楽および吹奏楽に関する記述が目立つ。演奏関係は、プリングスハイムの活動に関連するものが突出している。建物関係では、増改築や改修のうち、文部省からの交付以外に、小規模なものが同声会、学友会、上野児童音楽学園の寄付によって頻繁に行われている。また御前演奏との繋がりが見られるものも多い。これらもまた、乗杉社会教育論の要である「学校の社会化と社会の学校化」および「学校の実際化」の実践にほかならない。地域、社会、国家との連携によって学校を実際化し、経済的支援も受け、職員生徒への自覚を促し、地域社会国家に役立つ人材を養成する教育へと反映されるのである。

以下プリングスハイム時代の沿革を、「規程・全校的な事柄」「洋楽演奏」「邦楽」「上野児童音楽学園」「施設関連」「全校的および規程に関するもの」に分けて示す。



| 年            | 規程・全校的な事柄  | 洋楽演奏  | 邦楽  | 上野児童音楽学園  | 施設関連   |
|--------------|--|---|---|---|--|
| 1931<br>S 6  | 8～12月 校長欧米視察<br>9月 プリングスハイム着任  |   | 11月 邦楽演奏会を毎年1回とする   |   |  |
| 1932<br>S 7  | 1月 選科に作曲を加え4月より実施  | 2月 定期演奏会を年4回とする。同月マーラー《交響曲第5番》初演<br>7月 生徒管弦楽団の地方公演。同月 ワイル《ヤーザーガー》試演   |   |   |  |
| 1933<br>S 8  | 3月 選科に管楽を加える<br>5月 研究生徒と聴講生にも管絃楽合奏または合唱を課す   | 10月 ブルックナー《交響曲第7番》初演  | 2月 選科能楽に従来の謡に仕舞、囃子を加える  | 6月 上野児童音楽学園設置、本校生徒の教育実習を行う<br>9月 上野男児童合唱団設置               | 4月 校舎全体を大修繕。木造平屋建教室18坪復旧<br>5月 物置1棟木造平屋建4坪5合8勺と分教場倉庫木造平屋建5坪3合3勺新営、木造教室1階2階合わせて35坪6合6勺増改築<br>6月 木造平屋建教室および練習室19坪8合新営  |
| 1934<br>S 9  | 1月 甲種師範科の随意科目に管楽が加わる<br>5月 教練実施のため初めて野営演習<br>10月 校長満州国、中華民国に出張し同月帰朝  | 2月 マーラー《交響曲第6番》初演<br>3月17日 午後皇太子殿下御誕生奉祝演奏会<br>4月21日 皇后陛下行啓、照宮成子内親王殿下台臨（第2部）<br>9月 初めて北海道に出張演奏<br>10月 初めて対独放送<br>12月 初めて対英放送<br>12月 ヴェルディ《レクイエム》初演 | 2月 選科規程中能楽囃子を太鼓と小鼓、箏曲を箏と三絃とする<br>3月17日 午前皇太子殿下御誕生奉祝演奏会<br>4月21日 皇后陛下行啓照宮成子内親王殿下台臨（第1部）  | 11月 第1回演奏会。照宮成子内親王殿下台臨                                    | 3月 正門前道路に簡易舗装<br>4月 学生会より寄宿舎用木造平屋建て1棟21坪を寄付<br>7月 木造平屋建教室10坪増築<br>8月 分教場に木造平屋建教室1棟20坪新営<br>9月 木造教室2階部9坪増築  |
| 1935<br>S 10 | 4月 生徒吹奏楽団新設<br>9月 初めて生徒吹奏楽団の合宿練習   | 2月 マーラー《交響曲第3番》初演<br>4月 日暹交歓演奏（洋・邦・暹羅*）*シャム。タイ。<br>5月 生徒吹奏楽団出張演奏<br>10月 初の九州出張演奏  | 1月 初めて邦楽の出張演奏<br>4月 本校にて日暹交歓演奏（洋・邦・暹羅）に参加   | 2月 児童音楽学園児童200名が初めて本校演奏会に参加                               | 4月 同声会より事務室木造平屋建2坪増築寄付<br>10月 学生会より生徒食堂10坪2合5勺寄付<br>10月 児童学園より教室と渡り廊下増築と物置39坪5合寄付  |
| 1936<br>S 11 | 3月 初めて本科作曲部卒業生、本科器楽部管楽器専修の卒業生を出す<br>5月 ナチス音楽使節としてW.ケンプ来日、奏楽堂で演奏<br>9月 生徒吹奏楽団とともに初の生徒管弦楽団の合宿練習<br>9月 初の管楽担当外国人教師W.シュレーター（ホルン～翌年11月） | 2月 ブルックナー《交響曲第9番》初演   | 4月 社団法人能楽会に委託していた能楽囃子生徒養成方を解除し、本校において直接養成することに改める<br>6月 邦楽科設置<br>10月 邦楽科新設後初めて同科の地方出張演奏 | 4月 初めての卒業演奏会開催、高等科を新設<br>6月 オリジナル応援歌対独放送（下總作曲2部合唱《往けよ伯林》） | 1月 学生会より練習室1坪2合5勺増築寄付<br>4月 奏楽堂と分教場建設敷地、東京市本郷区湯島3丁目土地1960坪東京女子師範学校より管理換<br>4月 東京市牛込区市ヶ谷に備外国人教師官舎木造2階建延40坪新築交付<br>5月 児童学園より事務室2坪増築寄付<br>5月 分教場教室2階20坪増築<br>9月 児童学園より教室木造平屋建一棟13坪7合5勺と教室3坪増築寄付 |

|             |                                 |   |   |  |
|-------------|---------------------------------|---|---|--|
| 1937<br>S12 | 2月 本校学生歌制定<br>2月 邦楽調査掛規程<br>を改正 | 1月 初めて対米放送<br>2月 マーラー《交響曲<br>第7番》初演<br>6月 バッハ《マタイ受<br>難曲》初演<br>7月 プリングスハイム<br>送別演奏会 | 4月 選科邦楽<br>は観世流に宝生<br>流を加え、長唄<br>は唄及び三味線<br>に囃子を加える | 3月 本校敷地内に寄宿舎2階<br>建1棟と渡廊下改築交付<br>3月 児童学園より寄宿舎給水<br>装置一式寄付<br>3月 東京市牛込区市ヶ谷加賀<br>町備外国人教師官舎増築<br>4月 児童学園より教室と練習<br>室木造2階建延50坪増築寄付 |
|-------------|---------------------------------|---|---|--|

### 2-3a-8 東京音楽学校におけるプリングスハイムの活動

プリングスハイムは着任早々、音楽学校と海軍軍楽隊を併せた80名ほどのオーケストラと、全校生徒238名の合唱練習を開始した。練習初日、出欠の点呼で彼が生徒の名前をおかしな発音で呼んだ途端、楽しそうな笑い声が湧いた。その瞬間、彼は生徒たちと打ち解け、音楽学校を我が家のように感じたという<sup>11</sup>。12月5日の初演奏は、バッハ、ブラームス、ヴァーグナーの作品を並べて概ね好評であった。目指すはベルリン・ジングアカデミーあるいはパイロイト祝祭管弦楽団であった<sup>12</sup>。指揮者の提言で、練習時間は週10時間、定期演奏会は年4回に倍増した。翌年2月のマーラーの《交響曲第5番》を嚆矢として、曲目も一新し、近現代曲、大曲、難曲が次々に取り上げられる。6年間で演奏会は40回に及び、日本初演はマーラーの交響曲5曲を含む32曲、自作《管絃楽協奏曲》は世界初演である。

《ヤーザーゲル》試演のため、彼が能《谷行》について関係者に尋ねた折、誰もよく知らなかったと伝えられるが、同年11月、秋季能楽演奏会に《谷行》が上った。洋楽によって邦楽が刺激を受け活性化するという構図は、まさしく乗杉の描いた「国楽」への道程であった。

プリングスハイムの担当学課目は管絃楽、合唱、唱歌、作曲で、外国人教師は週18時間以内という契約にもかかわらず22時間となり、校長によれば、さらに「10時間以上ご奉公」であった。昭和10年度現在のお雇い外国人教師には彼の他、シロタ、ヴェーハーペニヒ、トル、ポラックがいた。このうち2名は18時間、他の2名が16時間で、彼等の4時間をプリングスハイムに充てると、ちょうど一人平均18時間になる計算である<sup>13</sup>。マエストロを支えた校長苦心の解決策であろうか。門下生は、金子登、山田和男、藤山一郎、柴田睦陸、長門美保、安部幸明、平井康三郎、高田三郎、長谷川良夫等、担当学課目の各分野にわたる。

プリングスハイムの契約は2年ごとに更新されたが、昭和12年7月31日の満期を以て更新されなかった。ナチスのユダヤ人政策に疎い日本国内は、突然の出来事と驚いた。しかし彼は、両親のうち父親だけがユダヤ系の「二分の一ユダヤ人」である。そのプリングスハイムの指揮で、昭和9年10月に奏楽堂からリヒャルト・シュトラウス《16声部無伴奏混声合唱》が対独放送されたことをナチスが看過するはずはなかった。プリングスハイムの後任となるヘルムート・フェルマーがドイツ宣伝省に提出した履歴書の日付は1937年2月14日、結びは「Heil Hitler!」である。

以下はプリングスハイムが関わった東京音楽学校関係の演奏である。彼の6年間で把握す

るためには、さらに学校外における演奏、批評、作・編曲などを網羅することが必要である。

東京音楽学校におけるプリングスハイム関係演奏会  
 (\*印は作品演奏、レコード録音、放送、ピアノ伴奏を示す)

『東京芸大百年史 演奏会篇第2巻』掲載頁↓

| 年     | 月  | 日     | 演奏会名    | 会場   | 演奏曲目                                    | 初演 | 独奏独唱者   | 備考   | 百年史頁 |
|-------|----|-------|---------|------|---|----|---|--|------|
| 1931  | 12 | 15    | 第61回定期  | 日比谷  | ベートーヴェン：ゲーテ作悲劇「エグモント」の序曲作品84            |    |   |  | 145  |
|       |    |       |         |      | バッハ：四つのピアノ及絃楽のイ短調コンツェルト                 |    | シロタ、見田公子、山田みどり、椎葉照子   |  |      |
|       |    |       |         |      | ヴァーグネル：「トリスタン及イゾルデ」の前奏及「愛の死」            |    |   |  |      |
|       |    |       |         |      | ブラームス：第一ハ短調シンフォニー作品68                   |    |   |  |      |
| 1932  | 2  | 27    | 第62回定期  | 日比谷  | マーラー：大管絃楽のための第五シンフォニー                   | 日  |   | 162  |      |
| 1932  | 6  | 9     | 第63回定期  | 日比谷  | ヘンデル：グローリア・パトリ                          | 日  |   | 176  |      |
|       |    |       |         |      | プリングスハイム：古式によれる小組曲                      | 日  |   |  |      |
|       |    |       |         |      | ストラヴィンスキー：詩篇交響曲                         | 日  |   |  |      |
|       |    |       |         |      | ヴァーグネル：「パルジファル」第一幕の「場変りの音楽」及「終りの場」      | 日  |   |  |      |
| 1932  | 7  | 2     | 学校歌劇試演  | 奏楽堂  | ヴァイル：学校歌劇「ヤー・ザーゲル」                      | 日  | 子供：増永丈夫、母：武田恵美、教師：伊藤武雄、生徒1：寶井眞一、生徒2：柳歳一、生徒3：秋月直胤                          | 188  |      |
| 1932  | 10 | 22/23 | 第64回定期  | 奏楽堂  | ブラームス：第四シンフォニー（ホ短調・作品98）                |    |   | 193  |      |
|       |    |       |         |      | モーツァルト：モテット「ユクスルターテ・ユピラーテ」ケッヘル目録第165    | 日  | トル  |  |      |
|       |    |       |         |      | ベートーヴェン：第五シンフォニーハ短調作品67                 |    |   |  |      |
| 1932  | 11 | 17-20 | 演奏旅行    | 大阪神戸 | メンデルスゾーン：序曲「ヘブリーデン」                     |    |   | 演奏会は2日間で昼と夜計4回。プリングスハイム出演の曲目のみ記載 大阪は中之島中央公会堂。神戸は第一神戸高女および関西学院ホール | 201  |
|       |    |       |         |      | グリーク：ペーアギュント第一組曲                        |    |   |  |      |
|       |    |       |         |      | シューベルト：春の信仰、無限なるものに、音楽に寄す、糸車によれるグレーチヒエン | トル | *ピアノ伴奏：プリングスハイム   |  |      |
|       |    |       |         |      | ブラームス：野の静寂、永遠の愛                         | トル | *ピアノ伴奏：プリングスハイム   |  |      |
| 1932  | 12 | 18    | 第65回定期  | 日比谷  | グルック：歌劇「アウリスのイフィゲニエ」の序曲                 |    |   | 206  |      |
|       |    |       |         |      | バッハ：ヴァイオリンと絃楽のための協奏曲ホ長調                 |    | ポラック  |  |      |
|       |    |       |         |      | ヴァーグネル：ロマンティック歌劇「ローエングリーン」の前奏曲と第一幕      | 日  | ハインリッヒ王：ウッヘルプフェニッヒ、ローエングリーン：蘭田誠一、エルザ：トル、テルムランド：伊藤武雄、オルトルード：武田恵美、王の伝令：増永丈夫 |  |      |
| *1933 | 1  | 23    | *レコード録音 | 奏楽堂  | ヴァーグネル：同上                               | 同上 | コロムビアレコード10インチ盤4枚   | 同声会報   |      |
| 1933  | 2  | 18    | 第66回定期  | 日比谷  | マーレル：第二交響曲                              | 日  | 斉藤静子、長門美保   | 223  |      |

のりすぎ かじゅ  
乗杉嘉壽校長時代の東京音楽学校 昭和3年～20年

|       |    |       |         |     |   |           |                                  |   |       |
|-------|----|-------|---------|-----|---|-----------|----------------------------------|---|-------|
| 1933  | 5  | 18    | 特別演奏会   | 奏楽堂 | ベートーヴェン：序曲レオノール第三番作品72ノイ                  |           |                                  | 文部大臣全国中学校長招待会。休憩を挟んで第二部は邦楽。                           | 235   |
|       |    |       |         |     | ベートーヴェン：第九交響曲 第一楽章                        |           |                                  |   |       |
|       |    |       |         |     | ヴァーグネル：歌劇「ローエングリン」第一幕第三場中の「祈りと終曲」         | 第65回定期に同じ |                                  |   |       |
| 1933  | 10 | 21/22 | 第68回定期  | 奏楽堂 | ベートーヴェン：弦楽合奏 大フーゲ作品133                    | 日         |                                  |   | 243   |
|       |    |       |         |     | バッハ：絃楽合奏附三台のピアノ協奏曲（ハ長調）                   |           | 豊増昇、水谷達夫、永井進                     |   |       |
|       |    |       |         |     | ブルックネル：第七交響曲（ホ長調）                         | 日         |                                  |   |       |
| *1933 | 12 | 9     | 第71回学友会 | 奏楽堂 | (作品演奏) プリングスハイム：「マリアの歌」「天の扉に」「神の子羊」「七つの問」 |           | 松原操                              | *プリングスハイム出演は無し  | 259   |
| 1933  | 12 | 14    | 第69回定期  | 日比谷 | ブラームス：独乙鎮魂曲 作品45                          | 日         | S長坂好子、B澤崎定之                      |   | 261   |
| 1934  | 2  | 17    | 第70回定期  | 日比谷 | マーレル：大管絃楽のための第六交響曲（イ短調）                   | 日         |                                  |   | 266   |
| 1934  | 3  | 17    | 特別演奏会   | 奏楽堂 | モーツァルト：ピアノ協奏曲D長調（戴冠協奏曲）ケッヘル537第一楽章        |           | 小倉末                              | 両陛下御結婚拾周年皇太子殿下御誕生奉祝演奏会 プリングスハイム指揮の曲目のみ記載              | 275   |
|       |    |       |         |     | ヴァーグネル：皇帝行進曲                              |           |                                  |   |       |
| 1934  | 5  | 8     | 特別演奏会   | 奏楽堂 | ベートーヴェン：「レオノール」第三番                        |           |                                  | 御前演奏披露演奏会   | 292   |
| 1934  | 6  | 2     | 出張演奏    | 横浜  | ベートーヴェン：「レオノール」第三番                        |           |                                  | 皇后陛下行啓御前演奏会披露皇太子殿下御誕生奉祝演奏会 開港記念横浜会館。プリングスハイム指揮の曲目のみ記載 | 293   |
|       |    |       |         |     | ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第五番変ホ長調「皇帝」作品73             | 澤崎秋       |                                  |   |       |
| 1934  | 6  | 16    | 第71回定期  | 日比谷 | ヘンデル：オーボエ、絃楽器及持続低音の為のコンチェルト グロッソ 作品3ノ2    | 日         | Ob坂逸郎、原功男、Vnボラック、末吉雄二 Vc平井保三、酒井悌 |   | 294   |
|       |    |       |         |     | ハイドン：バス独唱と管絃楽の為の大地の分配 安部幸明管絃編曲            | 日         | ヴッヘルブエニッヒ                        |   |       |
|       |    |       |         |     | モーツァルト：G短調交響曲 第40番                        |           |                                  |   |       |
|       |    |       |         |     | ヴェーベル：ピアノと管絃楽の為のコンツェルト シュトウツク 作品79        |           | シロタ                              |   |       |
|       |    |       |         |     | ヴァーグネル：「ニュールンベルヒの歌手」の前奏曲                  |           | ヴッヘルブエニッヒ                        |   |       |
| 1934  | 10 | 30    | 日独交換放送  | 奏楽堂 | シュトラウス：十六声部無伴奏混声合唱「夕」「聖歌」作品34             |           |                                  | 「シュトラウス生誕70年祝賀日独音楽交換放送                                | ※欄外補記 |
| 1934  | 10 | 31    | 第72回定期  | 日比谷 | シュトラウス：交響楽詩「ツァラッストラ」作品30                  | 日         |                                  | リヒアルト・シュトラウス誕生七十年記念演奏                                 | 311   |
|       |    |       |         |     | シュトラウス：十六声部無伴奏混声合唱「夕」「聖歌」作品34             | 日         |                                  |   |       |
|       |    |       |         |     | シュトラウス：アルプス交響曲                            | 日         |                                  |   |       |
| 1934  | 12 | 16    | 第73回定期  | 日比谷 | ウエルデイ：追悼彌撒曲                               | 日         | 中村淑子、丹治ハル、城多又兵衛、増永丈夫             |   | 328   |
| 1935  | 2  | 16    | 第74回定期  | 日比谷 | マーレル：第三交響曲ニ短調                             | 日         | A平原壽恵子                           | 児童合唱あり  | 334   |
| 1935  | 6  | 15    | 第75回定期  | 日比谷 | バッハ：ブランデンブルク協奏曲第二へ長調                      | 日         | Trp海上学、Fl山口正男、Ob坂逸郎、Vn井上武雄       | バッハ誕生250年記念   | 349   |
|       |    |       |         |     | バッハ：教会カンターテ第51「神を讃へよ」                     | 日         | Sトル                              |   |       |
|       |    |       |         |     | バッハ：ピアノ協奏曲ニ短調                             | 日         | 豊増昇                              |   |       |
|       |    |       |         |     | バッハ：大管絃楽の為の「前奏曲とフーゲ」変ホ長調 シェーンベルヒ編作        | 日         |                                  |   |       |
|       |    |       |         |     | バッハ：聖母讃歌                                  | 日         | S浅野千鶴子、M田中伸枝、A齋藤英子、T木下保、B伊藤武雄    |   |       |
|       |    |       |         |     | リスト「ダンテの神曲に拠る」交響曲(1)地獄篇(2)煉獄篇             | 日         |                                  | 児童合唱あり  |       |
| 1935  | 10 | 13    | 第76回定期  | 日比谷 | プリングスハイム：管絃楽協奏曲ハ長調 作品32                   | 世         |                                  | 「乗杉学校長並東京音楽学校に献ず」                                     | 358   |
|       |    |       |         |     | ワーグネル：「ニュールンベルヒの平民歌手」序奏                   |           |                                  |   |       |

|       |    |       |         |            |  |   |   |   |     |
|-------|----|-------|---------|------------|--|---|---|---|-----|
| 1935  | 12 | 14    | 第77回定期  | 日比谷        | ヘンデル：聖譚曲 救世主                           | 横田都馬子、齋藤静子、柴田睦陸、橋本秀次                                    | ヘンデル誕生250年記念  | 375   |     |
| *1935 | 12 | 16    | *ラジオ放送  | 奏楽堂        | ヘンデル：聖譚曲 救世主 (抜粋)                      | 同上  | JOAK 8時-8時40分   | 380   |     |
| 1936  | 2  | 15    | 第78回定期  | 日比谷        | ハイドゥン：交響曲 イ長調(ランツホフ新編)                 | 日   |   | 382   |     |
|       |    |       |         |            | モーツァルト：ピアノ協奏曲 変ホ長調 ケッヘル番号482           |   | 井口基成  |   |     |
|       |    |       |         |            | ブルックネル：第九交響曲 ニ短調                       | 日   |   |   |     |
| *1936 | 6  | 13    | 第89回学友会 | 奏楽堂        | (ピアノ伴奏) マイヤーベール：ヴァスコの詠唱「アフリカの女」より      | 柴田睦陸  |   | 399   |     |
| 1936  | 6  | 20    | 第79回定期  | 日比谷        | ベルリオーズ：「ファウストの劫罰」劇的物語 作品24             | 日   | M武岡鶴代、T城多又兵衛、Bar伊藤武雄、B秋月直胤  | 児童合唱あり  | 401 |
| 1936  | 6  | 26-28 | 演奏旅行    | 大阪中之島中央公会堂 | ワーグネル：「ニュールンベルグの平民歌手」の前奏曲              |   |   | 演奏会は2日間で計6回。両日とも昼の部は午後1時開演と3時半開演の2回、夜の部が7時開演。   | 413 |
|       |    |       |         |            | ウエーベル：ピアノと管絃楽のための協奏楽へ短調 作品79           | 高折宮次  | 昼の部は、左記の他、信時潔：無伴奏混声合唱「いろはうた」「あかがり」、Bar独唱ジョルダニ：美しの乙女、シューベルト：楽に寄す、山田耕筈：かやの木山(秋月直胤)、Pf独奏リスト：愛の夢第三「カムバネラ」(井口基成) |   |     |
|       |    |       |         |            | ウエーベル：歌劇「自由射手」中のアガーテの詠唱                | 長門美保  | 昼の部   |   |     |
|       |    |       |         |            | ヘンデル：聖譚曲「救世主」のハレルヤ合唱                   |   | 昼の部   |   |     |
|       |    |       |         |            | 国歌「君が代」奉唱(管絃楽附四部合唱)                    |   | 昼の部   |   |     |
|       |    |       |         |            | ベルリオーズ：「ファウストの劫罰」劇的物語 作品24             | 同上  | ファウストは夜2回行われ、BKより初日30分中継された。  |   |     |
| 1936  | 10 | 17    | 第80回定期  | 日比谷        | リュリー：絃楽協奏曲                             |   |   | 423   |     |
|       |    |       |         |            | ラモー：カンタータ「オルフォイス」                      | 浅野千鶴子   |   |   |     |
|       |    |       |         |            | ヴィヴァルディ：四つのヴァイオリンのための協奏曲 作品3 第10 短調    | 多久興、岩崎吉三、細谷正秋、喜田遷吉                                      |   |   |     |
|       |    |       |         |            | パレストリーナ：無伴奏混声合唱彌撒曲「ミサ・パベ・マルチェリ」        |   |   |   |     |
|       |    |       |         |            | バッハ：ブランデンブルグ協奏曲第四 ト長調                  | Vnボラック、F11山口正男、F12福家軍平                                  |   |   |     |
| 1936  | 12 | 19    | 第81回定期  | 日比谷        | ワーグネル：楽劇「ワルキューレ」(1)第1幕第3場(2)第3幕第3場     | (1)ジークムント柴田睦陸、ジークリンデ中村淑子(2)ヴォータン伊藤武雄                    |   | 442   |     |
|       |    |       |         |            | ワーグネル：楽劇「神々の黄昏」序幕、第1幕第2場、第3幕第2場、第3幕第3場 | ノルン1：稲見静子、ノルン2：横田都馬子、ノルン3：齋藤静子、ハーゲン：澤崎定之、ブリュンヒルデ：マリア・トル |   |   |     |
| 1937  | 2  | 27    | 第82回定期  | 日比谷        | 安部幸明：管絃楽「小組曲」作品2番                      | 日   |   | 1935年作曲。世界初演は1936年プリングスハイム指揮、上海シンフォニーオーケストラによる。 | 450 |
|       |    |       |         |            | シベリウス：管絃楽のための古譚曲「黄泉の白鳥」作品22-3          | E-Hr原功男   |   |   |     |
|       |    |       |         |            | マーレル：第七交響曲 ホ短調                         | 日   |   |   |     |
| 1937  | 6  | 19    | 第83回定期  | 日比谷        | バッハ：馬太受難楽                              | 日   | S奥田智恵子、A田中伸枝、T(福音史家)木下保、Bar(イエス)寶井真一、B村尾護郎  | 児童合唱あり  | 464 |
| 1937  | 7  | 8     | 告別演奏会   | 日本青年館      | ベートーヴェン：第九交響曲 ニ短調 作品125                | 日   | S中村淑子、A平原壽恵子、T木下保、B伊藤武雄   |   | 467 |

プリングスハイム活動シーンとして現段階で確認できたもののみ記載した。このほかにもピアノ伴奏等で登場している可能性がある。

※「百年史」253頁に学友会『音楽』第15号記事として「昭和8年10月30日 日独交換放送」と掲載されていますが、「昭和9年」が正しく、この記事は本来311頁に掲載されるべきものです。また「百年史」311頁に「昭和9年10月30日、31日 第72回定期演奏会」とありますが、「30日」は削除。このたび確認しましたので、訂正致します。

## 2-3a-9 プリングスハイム在職中の音楽学校付記

### (1) 昭和7 (1932) 年

1月に音楽学校初の男性声楽の外国人教師ヘルマン・ヴーハーペニツヒが着任した。乗杉がベルリンで自ら交渉して招聘した人物で、プリングスハイムの活動を支えた一人である。彼のバスはコロムビア・レコードに録音された《ローエングリン》の「王」役で聴くことができる<sup>14</sup>。

満州事変の勃発後、満州および上海方面在住の卒業生から同窓会誌に情報が種々寄せられる。またベルリンの下總皖一からは、ドイツ総選挙に向けて極右から極左までの5団体「ナツチ、独逸ナツチ、ツエントラル、ソシアルデモ、コムムニスト」の宣伝活動が報告される<sup>15</sup>。

昭和7年の夏期休暇中、校内で「文部省主催音楽講習会」「日本教育音楽協会主催 文部省および東京音楽学校後援 尋常小学唱歌講習会」「日本教育音楽協会主催東京音楽学校後援幼稚園小学校体育ダンス講習会」が開かれた。小山作之助が初代会長を務めた日本音楽教育協会が10周年を迎えた。乗杉が昭和5年3月会長に就任し、事務所も音楽学校内に移されたため、同協会と音楽学校の連携はより緊密になる。音楽講習会と唱歌講習会は現場教員を対象に、音楽学校教員が講師をつとめた。他に音楽教育功労者表彰、研究会、幼稚園から師範学校実業学校まで1,000名以上が出演しての演奏会、そして全国の小学校145校が参加した児童唱歌コンクールなどがある。ラジオ放送を用いた唱歌コンクールは社会と音楽の多様な連携を生み、年々規模を拡大していく。平成20 (2008) 年に第75回を迎えた「NHK全国学校音楽コンクール」のルーツである。

乗杉はプリングスハイムの合唱授業すらも学校参観によって公開し、「社会化」した。昭和7年は初等学校22校約1,000名、中等学校28校2,578名、合計3,500余名が参観した。東京近郊はもとより、修学旅行生も訪れ、音楽学校生の合唱を間近に見聞したのである。社会教育の実践による、音楽を全国に普及させるという建学の精神の具現化ともいえよう。校長は、プリングスハイムの希望に添って活動を後押ししただけではなく、音楽の社会化、実際化という手法によって、彼より一步先んじて道を拓きさえたのである。

### (2) 昭和8 (1933) 年

ベルリンにいた木下保と福井直俊はそれぞれ4月6日付と19日付で、満州事変以来、ドイツ国内の新聞で日本のことがさかんに取り上げられていること、またヒトラーの天下となり、ユダヤ人、反対党、外国人への圧迫が露骨になった様子を『同声会報』に寄稿している<sup>16</sup>。

2学期始業式(9月11日)の校長訓示は、奏楽堂建設に言及している。お茶の水の歯科医専が移転した跡地に奏楽堂と分教場と音楽会館<sup>17</sup>が新築され、本校校舎は上野の地に改築される見通しであると述べている。学校運営に関する校長の話であるから、他の内容と同様、相応の根拠に基づいたものと考えられるが、これらの計画はいずれも実現しなかった。

11月、「音楽週間」<sup>18</sup>という催しが日本教育音楽協会主催で校内外の会場において開かれた。

内容は、1.レコードコンサート、2.鳩山一郎文相による音楽講演、3.東京音楽学校・東京高等音楽学院・帝国音楽学校・武蔵野音楽学校による音楽会、4.混声合唱のラジオ放送、5.学校バンドおよび青少年団8組200名による音楽行進(靖国神社に参集し、宮城前で君が代奉唱、日比谷公園で散会)、6.参加校61による第2回児童唱歌コンクール、7.白木屋における「音楽展覧会」(記事によれば源義経所用の龍笛、ハンスリックのヨアヒム論原稿、ピアノ輸入当初のドイツ製スクエアピアノ等「何れも門外不出の逸品」とある)、8.東京音楽学校選科生徒による長唄、箏曲、一流の大家による能、狂言、9.トーキーの会、など9日間にわたった。

### (3) 昭和9 (1934) 年

演奏会の社会化の一例である。3月17日の「兩陛下御結婚拾周年皇太子殿下御誕生奉祝大演奏会」は第一部「邦楽」、第二部「洋楽」であった。前日のゲネプロを公開し、全曲をAK第二放送で中継した。一つの演奏会が二重、三重に「社会化」される。批評は、当代の名手を網羅した邦楽が洋楽を圧したと記している<sup>19</sup>。ヴァーグナーの《皇帝行進曲》はプリングスハイム指揮、高野辰之による「おう御稜威は四方に輝きて…」という作歌で、生徒250名により斉唱された。

同年の事業に、高等女学校向けの「鑑賞教育模範唱歌レコード吹込」がある。日本コロムビアの要請を日本教育音楽協会が受け、澤崎教授指導のもと、主に師範科生徒により演奏されたものである。シューベルトの《菩提樹》《野薔薇》、シューマン《流浪の民》、グノー《アヴェ・マリア》、ジルヘル《ローレライ》、ナポリ民謡《サンタ・ルチア》、瀧廉太郎《花》など20曲で、音楽学校生の歌声が女学生達の一つのモデルとなった。「諸学校ニ音楽ヲ実施スル」(注1「第三項」参照)精神は、昭和のレコード吹込にも流れている。11月の音楽週間は、海軍々楽隊演奏会が加わり、音楽学校やアマチュア合唱団などによる「千二百名の大合唱」へと膨らんだ。

### (4) 昭和10 (1935) 年

1月の邦楽出張演奏にあたり、乗杉は「日本民族の文化のため邦楽の重要性を認めよ」と題する一文で、己の信念を「洋楽との完全なる把握及邦楽の学理的基礎付と和洋両楽の融合より来る新国楽の創成」とし、「本校の使命は実にこの精神の実現に存してゐる」と述べた<sup>20</sup>。

音楽週間には吹奏楽コンクールも加わった。

### (5) 昭和11 (1936) 年

二・二六事件で休校となる学校も多いなか、音楽学校では翌27日校長訓示で「超非常時」における楽徒の心得を説き、児童学園も含め平常通り授業を行った。

6月25日、邦楽科の新入学者18名を迎える入学式と始業式が、父兄保証人、全職員全生徒出席のもと行われた。式終了後9時15分、関係職員と新入生は車を連ねて多磨墓地に直行し、邦楽科設置を決定した故松田源治文相の墓前に報告し、正午帰校、授業を開始した。校長は

邦楽科生徒の人格的訓練のため自ら週1回の特別訓話を行うほどの熱の入れようであった。

第4回音楽週間はさらに勢いづいた。特に神宮外苑競技場における陸海軍々楽隊の分列行進は4年後を想定してオリンピック入場式さながらに行われ、83校の女学生「三万人の大合唱」による「君が代」、乗杉作詞・下總作曲「国旗掲揚の歌」「伸びゆく日本」は全国放送された。日比谷公会堂では「千人の大合唱」が1階座席を埋め尽くし、オーケストラを舞台上げて行われた。予定通り昭和15年に東京オリンピックが実現していたら、音楽と社会をつなぐ乗杉社会教育論はその本領を発揮し、用意周到に本番を迎えたことであろう。

乗杉は11月17日から28日まで、伊澤初代校長とも縁深い台湾を視察した。学校と同声会の連携を重視する彼は、台湾在住の卒業生22名のうち21名と面会を果たし、「唯一人の方をミスして了った事はいかにも心残りであった」と記している<sup>21</sup>。昭和11年度の「地方別生徒数」には、台湾1、樺太1、朝鮮11、満州国2、中華民国10、暹羅国2、仏蘭西1とある<sup>22</sup>。

## (6) 昭和12 (1937) 年

プリングスハイム退任前に、支那事変が起こり、校長は直ちに『文部時報』に「我等の覚悟」と題する文章を載せた<sup>23</sup>。まだ多くの国民は楽観的態でいるが、この戦いは長期化し、日本は支那の背後にある大勢力を相手にすることになるのだと、国難突破を呼びかけた。

### 2-3a-10 プリングスハイムからの出発

プリングスハイム在任中は、彼の急進的な活躍と校長の着実な実践が相乗効果を生み、音楽学校の洋楽は一つのピークを迎えた。その一方で、邦楽科設置により、「東西二洋の楽」を備えた日本の音楽学校という立場を明確にした。建学の精神が乗杉社会教育論いうところの「学校の社会化」と「社会の学校化」によって再興・再構築されたと言えよう。音楽学校の社会還元的活動によって他校との連携も促進し、独り東京音楽学校の社会的認識を高めるのみならず、音楽界と音楽学校全体の興隆を図ったと考えられる。

プリングスハイムは昭和12年7月末退任し、秋にはタイに渡るが、ドイツを脱出した次男を迎えるため14年5月再来日し、東京で終戦となる。21年秋次男と渡米し、26年武蔵野音楽大学教授となり、34年勲四等瑞宝章受章。47年12月7日東京で89年の生涯を終え、鎌倉霊園に眠る。戦後の音楽学部定期演奏会は彼の弟子達の指揮で再開した。近現代の曲目がいち早く登場したのは彼の薫陶の賜物に他ならない。

プリングスハイムがその確たる信念と行動力によって賛否両論を呼んだように、乗杉の手腕と采配もまた折々に賛否両論を引き起こした。賛否両論は、乗杉社会教育論の是非も、彼個人の性格や志向も、またその時代をも映し出すこととなる。それは次の課題として、まずは乗杉時代に何があったのか、その時々にかなる決定がなされたのかを把握せねばならない。いずれにせよ、激変する時代の中で、変わらぬ信念を貫いたプリングスハイムと乗杉社会教育論の6年間の挑戦の先に「第2期b」があり、戦時下の舵取りが始まるのである。



## 注

- 1 第二項以下は「第二項 将来国楽ヲ興スベキ人物ヲ要請スル事」「第三項 諸学校ニ音楽ヲ実施スルコト」である。(『音楽取調所書類 明治十二年』。東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 (以下、『百年史』) 東京音楽学校篇第一巻』東京：音楽之友社、昭和62 (1987) 年、29～32頁参照)
- 2 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第二巻』東京：音楽之友社、平成15 (2003) 年、1070～1122頁参照。
- 3 加藤子明『日本の幻想／芸術家プリングスハイムの生涯』(東京：乾元社、昭和25 (1950) 年、149頁) によれば、プリングスハイムは8月24日ツォー駅を発った。東京音楽学校在職中のプリングスハイムについては下記拙稿参照。「上野の杜の波瀾万丈 第6回 プリングスハイムの時代」(『藝大通信』第17号、2008年、14～15頁)
- 4 プリングスハイムの略歴等は『百年史 東京音楽学校篇第二巻』1239～1245頁参照。プリングスハイムに関するまとまった研究書としては、早崎えりな『ベルリン・東京物語—音楽家クラウド・プリングスハイム』(東京：音楽之友社、1994年) がある。
- 5 『同声会報』第176号、昭和6 (1931) 年10月、13頁。
- 6 昭和59年11月22日、有楽町の外人記者クラブにて。『百年史 東京音楽学校篇第二巻』1516～1520頁参照。
- 7 クラウド・H.プリングスハイム『ヒトラー、ゾルゲ、トーマス・マン——クラウド・プリングスハイム二世回想録』池内光久訳、東京：彩流社、2007年、16～18頁。
- 8 『同声会報』第179号、昭和7 (1932) 年1月～第203号、昭和9 (1934) 年4月、訓示および19回連載の「外遊ところどころ」参照。
- 9 『同声会報』第179号、昭和7年1月、24頁。
- 10 とくに昭和9年2月の「訓育資料其三」では、思想偏向を病に見立て、その予防、診断、治療について詳述されている(『百年史 東京音楽学校篇第二巻』290～297頁)。
- 11 『音楽』第18号、昭和12 (1937) 年12月、29頁。
- 12 K. プリングスハイム「音楽学校の管絃楽団とその使命」(『音楽』第16号、昭和10年12月、195頁、203頁)
- 13 『文部省関係往復文書類 昭和十三年三月マデ 教務課』による。
- 14 『同声会報』第178号、昭和6年12月、7頁および『百年史 東京音楽学校篇第二巻』1245、1606頁。
- 15 『同声会報』第185号、昭和7年、7・8月、42～45頁。
- 16 『同声会報』第193号、昭和8 (1933) 年4月、42～43頁。
- 17 「音楽会館」は同窓会館として、日本教育音楽協会との協力による演奏会場、宿泊施設、社交場

を兼ねた施設が計画されていた。『百年史 東京音楽学校篇第二卷』1972頁参照。

- 18 以下の記載内容は『同声会報』第199号、昭和8年11・12月、36～41頁による。
- 19 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会篇第二卷』東京：音楽之友社、平成5（1993）年、280頁。
- 20 『同声会報』第211号、昭和10（1935）年2月、19頁。
- 21 『同声会報』第231号、昭和12年2月、13頁。
- 22 『東京音楽学校一覧 自昭和十一年至昭和十二年』201頁。
- 23 『同声会報』第236号、昭和12年9月、2～6頁に転載されている。

**Tokyo Academy of Music under the leadership of NORISUGI Kaju, 1928–1945 :  
Realization of its founding spirit and social education in practice**

HASHIMOTO Kumiko

This article represents an attempt to reevaluate Tokyo Academy of Music (Tōkyō Ongaku Gakkō) and its activities during the time when NORISUGI Kaju (1878–1947) was its principal, in terms of how effectively it realized the spirit of its founding, and of how Norisugi put his ideas for social education into practice.

Although it was the only national music school at the time, Tokyo Academy of Music experienced various challenges to its continued existence and development during the years when it was led by NORISUGI Kaju, namely from 1928 to 1945, the year of Japan's defeat in World War II. During this time, it embarked on a number of social education programs that formed the basis for the development of the music culture that Japan enjoys today. At the same time, however, due to its unique position and role in society, it was also caught up in activities associated with the war effort.

With the exception of studies of individual musicians and concerts, Tokyo Academy of Music of this time has gained little attention in previous research. This may be because of negative ideas about the contributions it made to the war effort through composition and performances. Another reason may lie in the emphasis placed so far on the role played by Norisugi in pushing the school down the path of militarism, as a bureaucrat earlier affiliated with the Ministry of Education who often negotiated successfully with the military authorities.

In the period before and during the war, musicians of the Tokyo Academy of Music often appeared in concerts for the Emperor and his retinue, in an effort to overcome its somewhat weak social standing and establish its reputation with the country and its public. With the same aims, the school also publicized the achievements of its first principal, ISAWA Shūji (1851–1917, principal in 1888–1891). As well as undertaking regular concert series outside of the school and traveling to different venues to give concerts on request, the school also arranged performances for radio broadcast, and established a major in composition. After Norisugi returned from a tour of inspection to Europe in 1931, he was instrumental in establishing the Ueno Children's Music School, the Japanese pioneer in early childhood music education. Within in Tokyo Academy of Music itself, a course in Japanese traditional music was established, and the increase in numbers of both staff and students at this time reflects its

growing role in social education. The peaks of its activities in these terms are its celebratory activities of 1940 (the 2600th anniversary of the country's founding) and its performance tour to Manchuria in 1942 in celebration of the 10th anniversary of the founding of the new state. In the four years before Japan's defeat in World War II, the school elevated the Japanese music course to a major, and added an extra year to the teacher training course, transforming it from a three-year course to a four-year one.

Earlier, as a bureaucrat in the Ministry of Education, Norisugi had worked in the administration of social education, establishing a department for that purpose within the Ministry and developing a unique theory of social education. His educational theories are currently being reappraised as the archetype for Japanese social education of the modern era. Throughout the pre-war and war years when he led the Tokyo Academy of Music, he consistently worked towards two goals: 1) realization of the spirit under which the school had been founded in the Meiji Era, ideals which he often returned to in his activities and writing; and 2) putting into practice his ideas for social education as summed up in his slogans "actualization of school education" and "school as society and society as school." Moreover, these goals worked effectively in the social context of the times, acting in coordination as Norisugi's guiding principles for management of the school's affairs.

Before making hasty criticisms of the educational policies of this time, we should be careful to gain an adequate understanding of how they worked. The ideas for social education proposed and realized by Norisugi still possess much of relevance for Japanese music education and its music schools today.